

# 保護者支援システム

公益社団法人 子どもの発達科学研究所  
所長・主席研究員 和久田 学



© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

1

# 保護者支援のRTIモデル

© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

2

## 保護者支援のRTIモデル

### 保護者との連携

- ここでの対象は、何らかの行動上の問題、発達リスクが明らかになった児童生徒の保護者
- 個別支援をするにしても、保護者の同意を得なければならない。
- よって、保護者連携は必須である。
- 一方で保護者トラブルはよく聞かれること

© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

3

## 保護者支援のRTIモデル

### よくある保護者トラブル

- 必要な支援の拒否: 個別扱いは止めて欲しい。みんなと一緒にいさせたい。やらせればできるはず。
- 連携の拒否: 医療、福祉との連携は必要ない。特に医療はお金がかかるし時間もとられる(保護者の)。
- 話し合いの拒否: 面談する必要を感じない。忙しくて時間がとれない。

### なぜだろうか？

© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

4

## 保護者支援のRTIモデル

### よくある保護者トラブル

- 保護者に何らかの事情があることは考えられるが、一方で学校の対応の問題も指摘されている。
  - ・ 最初に相談したときに、対応してくれなかった
  - ・ 前の担任と今の担任では言うことが違う
- 教師の言葉が、既に親を傷つけている(保護者の対応は、そのカウンター)

© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

5

## 保護者支援のRTIモデル

### 立場の違いを考える

保護者	職員
生まれたときから、将来まで	その1年、長くても数年
専門知識はない 子育ての経験も、今が真っ最中	それなりの知識、経験あり
子どもを個としてみる	他の子どもとの比較ができる
家庭環境(本人の慣れたところ)	施設環境(刺激多い)
いつも子どものことの責任を追及されたり、指導をされたりする立場	『先生』としての立場あり(非常に微妙ではあるが...)
孤立しているかもしれない	施設という組織として
いろいろな保護者(御本人が様々な状況を抱えている)	職員はある意味、セレクトされている

© Child Development Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁じます

6

保護者支援のRTIモデル

### 保護者支援・連携の全体像

- 【3次支援】**  
深刻事案の保護者対応
- 【2次支援】**  
事案発生、初期の保護者対応
- 【1次支援】**  
すべての保護者への啓発

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

7

保護者支援のRTIモデル

### 事後対応から 保護者連携を始めることのリスク

- 問題が起きてからの連絡、連携は、「親として責められる」「親子の失敗の指摘」と取られかねない。
- つまり親にとって、学校からの連絡、担任の話は、残念なこととなる。
- つまり、学校が親を傷つけている可能性がある。
- また、親の中には既に学校や支援者とのトラウマを抱えている者も少なくない。

➔ 事後対応ではないところから始める連携  
➔ 保護者へのトラウマインフォームドケア(トラウマがあると思って接する)

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

8

保護者支援のRTIモデル

### 保護者支援・連携の全体像

- 【3次支援】**  
深刻事案の保護者対応
- 【2次支援】**  
事案発生、初期の保護者対応
- 【1次支援】**  
すべての保護者への啓発

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

9

保護者支援のRTIモデル

### 1次支援 保護者への啓発： 事後対応ではないところから始める連携

- 啓発の基本は情報提供  
(基本的に保護者は絶対的情報不足、もしくは偏った情報に触れている)
- 「聞いて欲しい親は聞いてくれないからやらなくていい」は間違い  
まずは学校に協力的な保護者の分厚い層を作る
- 情報提供の内容
  - ・ 一般的な知識
  - ・ 学校のこと
  - ・ 問題行動・発達リスク対応システム

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

10

保護者支援のRTIモデル

### 提供すべき情報

- **一般的な知識**
  - ・ 子どもの発達の流れ(発達障害のこと)
  - ・ 子育ての基本的な考え方
- **学校のこと**
  - ・ 学校の教育(支援)目標、支援の方法
  - ・ 特別支援教育システム
  - ・ 現状
- **問題行動・発達リスク対応システム**
  - ・ リスクが明らかになったとき、どのようなことが起こるのか
  - ・ 責めるのではなく、子どもを守り指導するためであること

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

11

保護者支援のRTIモデル

### 大切なのは・・・

システムとして位置付けること。  
例えば……年間指導計画のように

- 4月 PTA総会:本校の教育活動、特別支援教育システム  
問題行動・発達リスク対応システム
- 6月 PTA教育講演会:子どもの発達のこと  
基本的な子育ての方法
- 9月 PTA懇談会:事例で学ぶ子育て  
学校での対応方法
- 2月 学年末PTA懇談会:将来のこと(次の発達段階)

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない複製を禁止します

12

## 大切なのは、 問題行動・発達リスク対応システム

- リスクが明らかになったとき(ツール類での見える化、行動、メンタルヘルス、適応など)に、学校がどう動くのか？
- リスクがあると保護者が心配になったとき、保護者はどう動くべきなのか？
- 簡単でもいいので、伝えておかなければならない。
- それが分かっていたら、担任、学校からの連絡に「ああ、あのシステムが動いたのだ(それで我が子が守られるのだ)」と考えられる。

## 問題行動・発達リスク対応システム

1. ツール類、観察等により、リスクに気づく
2. アセスメントを行う:校内の複数の教師等が観察し、状況を明らかにする
3. 支援会議の開催:学校としての支援の方針を決める
  - 子ども中心に考える
  - 問題行動があったとしても、子どもを罰する、責めるという考えではない
  - 長期的な視点を持って支援をする
4. 保護者との連携:学校としての方針の説明と協力をお願い
5. 定期的な連絡と相談

## 保護者と連携する場合の留意点: トラウマインフォームドケア

- 保護者と敵対しないことが原則。  
そのためにも、時間をかけても回り道をして良い。(戦略的に)
- 保護者を絶対に責めない。  
(一方で、虐待を疑ったら適切な対応をする→通告を含めて)
- 保護者を支援対象者と考え、  
責めるのではなく、支える。これまでの支援を労う。

## 保護者が支援対象である場合(複合事案)

保護者との対応が困難になりやすいのは複合事案。

タイプ	項目	チェック	主な連携先
虐待など 親子関係の問題	虐待のエピソード、親子関係の問題などが強く疑われる。		児童相談所、医療、行政(警察)
貧困、外国人、 保護者の困難さ	貧困、外国人家庭、保護者の障がいや疾患など、家庭そのものが支援対象であることが考えられる。		児童相談所、医療、行政、福祉
関係性トラブル	保護者同士、保護者と教師、児童生徒と教師などのトラブルが過去にあった、もしくは現在も続いている状態にある。		児童相談所、教育委員会、福祉、行政
メンタルヘルスの 問題	児童生徒本人に抑うつ、不安、依存などに加え、幻聴等の精神疾患が疑われる状態にある。		保護者、医療・心理、福祉
いじめ重大事態	いじめ防止対策推進法にあるいじめ重大事態が疑われる。		教育委員会、行政、警察

## 複合事案の場合は、第三者を入れる

- 複合事案の場合は、学校と保護者(家庭)の二者関係を避け、第三者を入れる。(初期から)
- 特に「関係性トラブル(大人同士のトラブル、関係のこじれ)」がある場合は、法律の専門家(スクールロイヤー)に相談しておく必要がある。
- 第三者を入れることにより、保護者支援と子ども支援をある程度、切り分けられると良い。

